鬼平犯科帳 22

特別長篇 迷路

池波正太郎

文春

文春文庫

鬼平犯科帳(二十二)　特別長篇　迷路　　定価はカバーに表示してあります

1992年1月10日　第1刷

著　者　池波正太郎
発行者　豊田健次
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3－23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan
ISBN4-16-714247-3

文春文庫

鬼平犯科帳(二十二)

特別長篇 迷路

池波正太郎

文藝春秋

特別長篇　迷路　目次

豆甚にいた女　7
夜鴉　39
逢魔が時　70
人相書二枚　101
法妙寺の九十郎　128
梅雨の毒　153
座頭・徳の市　184
托鉢坊主　221
麻布・暗闇坂　250
高潮　280
引鶴　311

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

鬼平犯科帳（二十二）

――特別長篇　迷路――

豆甚にいた女

盗賊どもの半数は、海からやって来た。

妙に生あたたかい、春の夜の闇が重くたれこめた江戸湾の何処からか、二艘の舟があらわれ、これに七人の盗賊が乗り込んでいた。

月も星もない夜で、汐の香が濃い。

盗賊どもが、押し込みをかけようとしていたのは、船松町の薬種屋・笹田屋伊兵衛方である。

このあたりは、築地の内海寄りになっている。

物の本に、

「寛永のころ、オランダ人が大砲数門を幕府に献上したので、将軍は築地の海浜にお

いて南北八町の地を画し、大砲を演習せしめた」

そこで、鉄砲洲とよばれるようになった。

かの〔忠臣蔵〕の事変が起るまでは、浅野内匠頭長矩の江戸藩邸も鉄砲洲にあった。現代の東京都中央区湊町・明石町が、それにあたる。

鉄砲洲の船松町から十軒町、明石町にかけて、薪問屋と炭問屋、材木屋が多く、それぞれの店の裏手は江戸湾に面しており、荷舟の出入りのための船着場をもっている。

だが、薬種屋の笹田屋には船着場がない。

材木屋と炭問屋にはさまれた笹田屋の店構えは小さなものだが、

「笹田屋伊兵衛は金貸しもしているそうな。地下蔵には千両箱が山になっているらしい」

などと、まことしやかなうわさもきこえる。

いずれにせよ、盗賊どもがねらいをつけるほどだから、相当の金持ちにちがいない。

笹田屋は、越中（富山県）から特別に仕入れる〔熊の胆〕だけを売り、値も高いが効目は折紙つきだそうな。

盗賊どもを乗せた小さな荷舟と猪牙舟は、しばらくの間、海上にとどまっている。

江戸湾には、大きな荷舟がいくつも停泊しており、酔った船頭の唄声も遠くきこえていたが、それも熄んだ。

盗賊どもの舟は、およそ一刻（二時間）ほども海上にただよっていたろう。と……。

彼方の、笹田屋と材木屋の間の細道に、ぽつんと灯が浮いた。

その灯が左右に二度三度とゆれうごいた。

それが合図だったのかして、盗賊どもを乗せた二艘の舟は、俄然、鉄砲洲の岸を目がけてすすみはじめた。

彼らは、材木屋の船着場へ二艘の舟をつけるや、音もなく、猿のように舟から飛びあがり、細道の闇に消えた。いずれも灰色の盗み装束に身をかためていたところを見ると、これまでにも大きな盗みばたらきをしてきた盗賊団といってよい。

その中の二人だけが、船頭の姿で船着場に残り、あたりの闇に油断なく目をくばりはじめた。

このとき、表の道から、これも盗み装束の七人があらわれ、舟からあがった五人と合わせ、十二人が、笹田屋の細道に面した通用口の前へあつまった。

細道で合図の灯を振ったのは、おそらく、笹田屋伊兵衛方へ何くわぬ顔をして潜入していた引き込みなのだろう。女中か何かになりすましていたものか……。

通用口の板戸が、わずかに開いているのは、引き込みが内側から開けたのであろう。

「よし」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

盗賊の頭が、低くいって、うなずいて見せた。
配下の一人が、板戸をしずかに引き開けようとした。
その瞬間であった。
「池尻の辰五郎。年貢のおさめどきじゃ」
頭上から、凜々たる声が落ちて来た。
愕然となる盗賊どもへ、
「火付盗賊改方・長谷川平蔵である。尋常に御縄を受けよ」
有無をいわせぬ、この声の恐ろしさに盗賊どもは立ち竦んだ。
火事装束の長谷川平蔵が、同心の酒井祐助と木村忠吾を従え、笹田屋の屋根へ姿をあらわした。
「逃げろ」
われに返った盗賊どもは、脇差や短刀を引きぬき、乱れ立った。
船着場のほうで、男の叫び声がした。見張りに残っていた二人にも、盗賊改方の手がまわったのだ。
突然、細道の両側から龕燈の光りが闇を断ち割り、盗賊どもへ迫って来た。
笹田屋と細道をへだてた材木屋の屋根から、いくつもの投網が落ちてきて、必死の逃走にかかる盗賊どもの躰を包み、手足の自由を奪った。

「あぁっ……」
「畜生めっ……」
狼狽した盗賊どもは、手にした刀で投網を切り破ろうとして、たがいに躰を傷つけ合った。
捕物が終ったとき、逃走した盗賊は一人もいなかった。
二年前から笹田屋の女中となって入り込み、一味の引き込みをつとめていた女賊も、すでに捕えられている。
こうして、池尻一味のすべてが捕えられたわけだが、首領の池尻の辰五郎ひとりは、投網の中で自害して果てた。
辰五郎は、おのれの短刀で、ただ一突きに心ノ臓を突き通していた。
「盗賊ながら、みごとにしてのけたわ」
と、長谷川平蔵は、筆頭与力の佐嶋忠介をかえりみて、そう洩らした。
池尻の辰五郎は、五十を四つ五つはこえていたろう。
老人ながら、目鼻立ちのすっきりとした顔貌で、細身の躰も引きしまっていた。
上方から北陸路を縄張りにしていた辰五郎の、江戸での盗みばたらきは、これで二度目であった。はじめは五年前に、芝の浜松町の瀬戸物問屋・伏見屋へ押し入り、千二百八十余両を盗みとって、姿を消してしまい、このときは盗賊改方が裏をかかれた。

しかし、今度は、池尻一味の盗賊が盗賊改方の水も洩らさぬ探索網によって出しぬかれたことになる。

この捕物が成功したのは、女密偵おまさのはたらきに負うことが多かった。

長谷川平蔵は、しきりに辞退をするおまさへ褒美の金をあたえ、

「しばらくは、のんびりと、躰をやすめるがよい」

と、労をねぎらった。

これで、池尻の辰五郎一件については、

（すべて終った）

平蔵は、そうおもっていたのだが、それではすまなかった。

辰五郎の自害と、一味の捕縛は意外な波紋をひろげ、長谷川平蔵を苦しめることになる。

一

火付盗賊改方の同心・細川峯太郎が、立花家の下屋敷を出たときには、九ツ半（午前一時）ごろであったろう。

松蟬の声もきこえようというのに、この二、三日は冷え込みが強い。

小田原提灯を手にした細川同心は、田圃の小道をたどりつつ、たてつづけに嚏をは

なった。

「ああ、畜生め……」

だれにともなく、細川は悪罵をはなった。

それは、自分自身への悪罵といってもよかった。

「どうして、こうも、目が出ないのか……」

つぶやいた細川同心は、うらめしげに、いま出て来た立花家の下屋敷を振りかえった。

ちかごろの細川峯太郎は、とんでもない悪魔に魅入られてしまっている。

博奕に狂いはじめたのである。

といっても、細川は何しろ盗賊改方の同心なのだから、連日連夜、博奕に狂っているわけにはまいらぬ。

それゆえ、なおさらに焦りがつのってくる。

むろんのことだが、博奕をしているときの細川峯太郎は一介の浪人に変装しているわけだ。

いまの細川の見廻り区域は、浅草から本所になっており、浪人姿となって編笠に顔を隠し、毎日のように見廻りをつづけていた。

浪人になりきっているときの偽名は、細井平太郎であった。その〔平〕の一字は、長官の長谷川平蔵の一字を無断借用している。

細川峯太郎が、生まれてはじめて博奕の味をおぼえたのは、去年の年の暮れであった。そのころ、細川は、小泥棒の金井の万吉の行方を探索していた。

金井の万吉は、家に放火をし、そのどさくさまぎれに金品を盗むというやつで、小泥棒の一人ばたらきだからといって、捨ててはおけなかった。

何となれば、当時の放火は重罪であって、人びとへあたえる災害が現代の比ではなかったからだ。

金井の万吉は、浅草から下谷にかけての、諸大名の下屋敷の中間部屋で開かれる博奕場へよく顔を出すというので、細川同心と老密偵の相模の彦十が夜な夜な博奕場をまわった。

こういうことにかけては、彦十にかなうものはいない。

そこで細川も、彦十に教えられて、賽の目を追うことをおぼえた。

博奕場へ顔を出すからには、博奕をしなくてはならぬ。そうでないと怪しまれる。

「よいか、彦十。細川はまだ若い。賽子の味に病みついては困る。わかっていような」

と、長谷川平蔵に念を押された相模の彦十は、

「おじさん。大丈夫かねえ……」

心配をするおまさへ、

「なあに、賽子の恐ろしさを、いやになるほど細川さんの耳へふきこんでおいたよ」

「あのお人は、何にでも夢中になってしまう性質だからねえ」
「ことに、女には目がねえ人だが、いまは女房もちだし、あれで、このごろはなかなかどうして、以前のように間がぬけたところもなくなってきたよ。ね、そうだろうじゃねえか」
「まあ、ねえ……」
今年に入って、正月の中ごろに、細川と彦十は、金井の万吉が下谷坂本三丁目の川魚料理屋〔鮒宗〕から出て来たところを、みごと、御縄にかけてしまった。
すでに万吉は、打ち首になっている。
「細川。お前も、どうやら一人前の同心になったな」
長官にほめられ、金一封を頂戴し、細川峯太郎は大よろこびをしたものだ。
以来、長谷川平蔵も相模の彦十も、細川が博奕からはなれられなくなってしまったとは、おもいおよばなかった。
それというのも、博奕場が開かれるのは夜にかぎったことではなく、昼間でも、ひそかな場所でおこなわれているからであった。
探索のため、博奕場へ出入りをするうち、細川峯太郎は彦十も知らぬ連中と知り合い、その手引きで、昼間の博奕に熱中するようになっていた。
そのことについては、いずれ、語りのべることになるが、この夜に立花家・下屋敷の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor